

私たちが世界遺産の話を持ち上げたのは、らい予防法改正運動やその他の運動の中で、私たちが今まで療養所の中で生活してきたこと、このことが段々埋もれていくんじゃないかという不安からです。法律で予防法は廃止されたり、補償を受けることで一応解放された形になってはおりますけれども、まだまだ偏見差別は私たちの上にあります。これはハンセンだけではありません。いろんな障害を持つ人たちにも、そういうことが起きているということですよ。

六六年も生活しておりますと、長島が私の古里になりました。古里になったこの長島愛生園、邑久光明園、大島青松園では島に閉じ込められてしまい、また他の園では、陸地であっても山奥であったり、人の来ないようなところへ療養所を建てて、とにかく祖国浄化ということでのらいを撲滅していった。そういう歴史の中で私たちの生活であったと私は思っています。

現在愛生園では開園以来の建物が多く遺っております。園長官舎は昭和五年に建ったものですが、遺っています。それから事務本館、今歴史館にしている建物が開園以来のもの。監禁室、これは壁だけしか遺っております。掘り起こしたらまだそのまま出てくるような状態で埋まっている。それから日出の患者浴場とか収容所の回春寮、納骨堂、その他いろんな建物が残っています。自分たちで建てたものもありますし、監房のように国が建てた建物もありますが、これがどんどん崩されていく、捨てられていくというのが私たちには何ともたまりません。今まで愛生園で亡くなっていった五、三〇〇人以上の方々が、長島愛生園を自分の古里として家を築いてきたという施設です。そういうところを遺していった方がいいんじゃないかという気持ちに私たちはなってきました。

世界遺産という、負の遺産として、全国の療養所それぞれが同じ境遇であり、同じ仕打ちを受けてきた証でもあると思いますので、そういうことをしっかりと行っていきたくと思っています。

引き合いに出すのもどうかと思いますが、水俣は水銀を含んだ泥の海岸をそのまま埋めてしまったという話を聞きます。そのように、私たちの苦しかった生活を、何もなかったというような形で無くしてしまわれると、とても辛い。先輩たちの進んで来た道も併せて、もっとすくいあげたいと私は思っています。

今後、世界遺産に登録されましたら、少年たちが長島に来て一緒に遊べる島であってほしいし、人権学習の島として育てて欲しいと思います。これから運動が始まるんですが、皆さん方の御協力をよろしく願います。